



香川県遊技業協同組合

平山 剛

理事長

です。これは「やるか、やらないか」ではなく、「やるしかない」とはいえ、ホールも厳しい状況ですから、お客様に支持される遊技機を見定めなければ、経営が成り立ちません。メーカーも良い機械を開発して業界を活性化していくたい、という想いは同じだと思います。全日遊連の機械対策委員会でも要望を上げていますが、業界団体の垣根を越えて共に考えていくことで、乗り越えられるのではないかと思います。

——香川県下のホールの情勢はいかがでしようか。

平山 組合員67軒、非組合員8軒、合計75ホールが営業しています。過去10年間で店舗数は14軒減少しました。店舗数の減少と店舗の大型化は全国的な流れですが、他の都道府県と比べると、相対的に新規出店も少なく、店舗の減少率も緩やかで、1店舗あたりの平均設置台数もそれほど増えていなない。変化が少ないエリアだと言えます。

——香川県のコロナ禍の対応はどうでしたか？

平山 幸いにも、香川県では行政からの協力休業を含めた要請に100%応えられました。私は、今回のコロナ禍を「新しい時代へのチエンジのきっかけ」と捉えています。同友会では1930年11月がパチンコ誕生の年と

定義しています。100年産業としてどう変わっていくか、101年目に向けてどう次世代にバトンタッチしていくかが我々の世代の最大の使命で、それに向けた様々な施策を検討してきました。もともと、業界は変わらなければならぬという意識は持っていたのですが、今回のコロナ禍によって変革への決意がよりいつそう強くなりました。

——何をどのように変える必要がありますか？

平山 ホールでの営業方法や従業員の働き方、メーカーの商習慣も変わっていくでしょう。重要なのは、社会的な地位向上やマイナスイメージの払しょくです。働く人が誇りややりがいを感じて、自ら成長していくことが、業界の活性化につながります。

——そのため、何をするべきでしょうか？

平山 ひとつは、正確な情報の発信です。コロナ禍中におけるマスメディアの報道でも、パチンコホールがバッシングを受けました。それは真摯に受け止めなければなりませんが、少し気にならぬ存在をイメージしていました

ツシングが見受けられたことです。パチンコホールでクラスターが発生したなど、事実ではない報道がなされた。結果的に、来店したお客様に対しても誹謗中傷の声も上がってしまいました。ギャンブル依存問題についても、エビデンスなき誹謗が少なくありません。正確な調査とその広報の重要性を改めて感じました。そうしたことが起きていくことが重要だと思います。社会貢献活動や寄付だけではなく、パチンコホールの提供価値を広げ、地域での役割を強化していくこと。パチンコホールがあつて良かったと思われるような存在になっていくことです。

——提供価値の強化などと、何でしようか？

平山 遊技機の規則が変わって遊びやすくなつた、あるいは喫煙環境が変わったことをノンユースーや若年層に発信すること。もうひとつは、業界に従事する若者を起点に情報を発信していくことです。弊社が新卒採用で出逢う学生の7割以上はノンユースーです。内定者にはパチンコホールに行つてもらいますが、そうするとパチンコホールに対する印象が変わるようです。小暮らしく寂しい高齢者の方が、ここに来れば誰かと触れ合える、つながれる。地域の有益な情報が得られる、あるいは発信できる。何かしらの困りごとや課題が解決できる

す。20代から70代、80代の高齢者まで幅広い世代が集まる娯楽施設は、他に見当たりません。世代を超えたコミュニケーションが提供できれば、地域におけるパチンコホールのプレゼンスは高まつていくはずです。

——当面の課題はなんでしょうか？
平山 重要な事項は山積していますが、短期的には新規機への段階的入替え

——大変な時期での理事長就任になりました。
平山理事長（以下敬称略） そうですね。昨年は消費税率が10%に引き上げられ、今年は完全分煙化への対応、そして新規機への入替えなど、ホールのコスト負担が強いられる時期であることは想定していました。そこに新型コロナウイルスという、未曾有の出来事が発生した。経営環境としては、過去に経験したことがないほど厳しい状況と言つていいかもしません。

「変革の時」という決意を持って

コロナ禍による客数の減少や新規機への入替えなど、激動の中でバトンを受けた香川県遊協の平山新理事長。「新しい業界に生まれ変わるとき」という強い決意で理事長職に臨む。



ひらやま・つよし
グランド商事・アドバンス代表取締役。1961年9月29日、愛媛県今治市生まれ。2000年から香川県遊技業協同組合の副理事を2期務め、2020年6月に理事長就任。日本遊技産業経営者同友会、日遊協中国・四国支部などでも要職に就く。趣味はゴルフ。

続きは月刊アミューズメントジャパン
8月号をご覧ください